橋本　保 1967．日本のスミレ．206 pp．誠文堂新光社，東京．
浜　栄助 1975．原色日本のスミレ．280 pp．誠文堂新光社，東京．
—— (編) 1987．写真集日本のすみれ．188 pp．誠文堂新光社，東京．
五十嵐　博，梅沢　俊 2000．ケマルバスミレ北海道に産す．植物研究雑誌 **73**: 187–189.
いがりまさし 1996．山渓ハンディ図鑑 6．日本のスミレ．247 pp. 山と渓谷社，東京．
井波一雄 1966．日本スミレ図譜．187 pp 六月社，大阪．
Ledebour C. F. von 1842. *Viola milabilis*. Flora Rossica. **1**: 250–251.
Maximowicz C. J. 1859. *Viola milabilis*. Primitiae florae Amurensis. Mem. Acad. Sci. St. Pétersb. Sav. Étrang. **9**: 49–50.
籾山泰一 1982．スミレ科．日本の野生植物．草本 **II**：243–253．平凡社，東京．
田渕誠也 1996．すみれ図鑑．174 pp．栃の葉書房，鹿沼．
大賀歌子 1930．すみれ図譜．p. 8，pl. 8. 生き物趣味の会，東京．
高橋　誼 1967．日高北部の植物相(2)．北陸の植物 **15**: 97–102.
王　慶瑞 1991. *Viola mirabilis* L. 中国植物志 **51**: 26–29. 科学出版社，北京．

([a]北海道野生植物研究所
001-0013 札幌市北区北13条西3丁目13番地，
[b]055-[redacted] 門別町[redacted]，
[c]056-[redacted] 静内町[redacted])

新　刊

□岩月善之助（編）：**日本の野生植物　コケ**
192 pl. + 355 pp．2001．平凡社．￥19,500.

963 種の見事なカラー写真に加えて，線画による説明も加えて約 1700 種類という，日本産コケ植物のほとんどすべてをカバーする図鑑である．これ迄の「日本の野生植物」シリーズと構成が異なるのは，カラー写真頁が一まとめになって先頭に置かれていることと，植物体が小さいために，説明のための細部の線画が多数示されていることである．カラー写真の大部分は，伊沢正名氏が現場で専門家の指導を受けながら，三年余をかけて撮影したものという．ほとんどすべてが拡大撮影のため，大変苦労されたようだ．おかげで専門外の人間の鑑賞にも耐える，美しいコケの映像を見ることができ，あらためてコケ好きの人が増えるのではないだろうか．日本の図鑑に不可欠な和名も，本書の制作にともなって従来は学名しかなかった 100 以上もの種に新たに与えられている．これもコケ学の普及に寄与することだろう．環境問題や自然保全の意識が進む中で，植生を下支えするコケを認識理解する上で，歓迎すべき一書である．巻頭にコケ植物の見方，用語解説，巻末に学名，和名索引があるが，新和名，新学名の表示があるとよかったと思う．（金井弘夫）

□エリック・ハンセン（著）屋代通子（訳）：**ラン熱中症～愛しすぎる人たち**　292 pp．2001．NHK 出版．￥2,000（税別）．

本書は原題を Orchid Fever: A Horticultural Tale of Love, Lust, and Lunacy という．出版年は 2000 年で植物紀行家・冒険家 Eric Hansen が書いた．タイトルから容易に想像されるように，本書は近年ますます愛好者が増し，世界中がその熱狂的なブームに湧くランに関係する人々の生態を描いている．野生種を絶滅から救う目的で生まれたワシントン条約締結以後，資源的・園芸的価値ある植物を獲得しようとする欧米国家，巨大研究機関，個人のバトルは熾烈をきわめている．特に野生ランでは，営利目的と教育研究目的の利用には確固たる線引がなされているため，特定の学術目的以外の利用のための取引は国際的に厳しく禁止されている．それがゆえ，違法な採取，移入，密輸，取引を巡るハンターの暗躍，研究に名を借りた不正行為を働く研究者が横行し，さらにそれらの指摘・指弾，そしてスキャンダル等が後を絶たない．

本書ではこうしたランの採取，取引，研究に絡んで著者が得た情報やインタヴューによって，現実の状況が紹介され，種々の問題点が指摘されているところに，私は興味を抱いた．不幸にも日本には世界的な野生植物研究機関

がないので，読者の多くは実感する機会がないだろうが以下の指摘は最近私が痛感するところである．つまり，「現在では，研究分野でも個人の研究者と機関研究者の間には大きな隔たりが生まれてしまい，ランに関するあらゆる研究や出版，そして学名の命令までも，一部の権威ある研究所の支配下におこうとしている趨勢があるようだと，ランの世界の多くの人が指摘している」，という部分である．これを開発途上国の植物学者は「科学的帝国主義」と呼んでいるという．

この問題は単にランだけの問題ではない．日本はこの分野でまったく蚊帳の外であろう．劣悪な施設しか持たない日本の研究機関の現状では，ここでいう科学的帝国主義の仲間には到底入り込む余地がない．私はだからそういうのではない．研究の自由は保証されるべきだと思う．本書を読みながら私はセント・ルイスの国際植物学会を前に盛んにメールでやり取りされた新名登録の問題を思い浮かべた．それはともかく植物遺伝子資源を巡る凄まじい争奪戦が臨場感をもって記述されており，本書は読み応えがある．

もう一点，「ラン泥棒」とされた人々の多くが実は真にランを護ろうとしている人たちで，地位も権威もある「保護論者」たちのなかに，「学術研究」の名目でワシントン条約の許可証を悪用し，ランを不正に入手している者がいる，ということが指摘されている．この指摘に該当しそうな本書での登場人物をかなり知っている私は，これを複雑な気持ちで受け止めたものである．うすうす感じていた人は多いだろうが，こういうデリケートな問題をはっきりと明言した勇気は尊重すべきだろう．この点で本書は自然保護のあり方にも一石を投じる問題提起になると思う．

そういことを書いた後に，キューのGribbやライデンのEdo de Vogelといった国際的ラン研究者の名前を出すのは気がひけるが，著者と彼らのやり取りは興味深い．東南アジアのランに大きな貢献を果たした外交官，Gunnar Seidenfadenとのインタヴューは彼の人柄が彷彿としてくる．

私はこれを翻訳でのみ読んだので，翻訳の正確さや良し悪しにコメントできないが，とても魅力を感じた．ただ，オランダ人Edo de Vogelのエド・デ・ヴォーゲルの読みはいただけない．どう表記するかむずかしいが，フォーホだろう． （大場秀章）

□塚谷裕一：**蘭への招待—その不思議なかたちと生態** 219 pp. 2001. 集英社. ¥680（税別）.

Arabidopsis を中心に葉の発生や形態形成を遺伝子レベルでの解析を含めて研究する著者はまた，多才の人で，これまでにも植物に関連した多くの著書を著し，ファンも多い．野生植物にも詳しい彼が中でも関心を示しているのがラン科植物である．ヒマラヤ植物研究では調査隊が収集したラン科植物の同定を分担している．

本書は，集英社新書という最近登場した新書の中のひとつ（74）で，著者が集めたあまたの情報からラン科植物のもつ魅力やその特色を，専門外の人にも判り易く伝えることを意図して書かれた読み物のようにみえる．記述はいたって平易で，術語は極力は使わないばかりか，ときには品位に欠ける俗な表現も随所に顔を出す．この有り体の気取らない書き方が本書を一層親しみ易いものにするのに成功している．こういう点が，著者の巧さでもある．本書は植物の多様性を研究する専門家にも有益である．植物を見る目の確かさ，斬新さには学ぶところも多い．私事で恐縮だが，かつてランだけには手を出すなとT先生から戒められ傍観してきたが，周囲のラン研究者からも誘われていくつかのラン科植物の論文に名前を連ねることになってしまった．本書の著者とも最近ヒマラヤのラン科植物についての覚書きを発表したばかりである．それで余計思うのだが，ラン科植物にはmaniaとphorbiaという人の受容に両極が存在する．これは他の植物では稀有なことに思う．本書はmania側からみたランだが，phorbiaの側からみたラン書というのも興味深そうだ．著者はこれをどう思うか，知りたいところでもある． （大場秀章）